

理系の視点

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大石 久和



コロナ騒動の収束の兆しがなかなか見えてこないが、厚労省や専門家から流れてくる情報があまりにも統計的でなく、会員諸氏にはイライラが募ったことだろうと推察する。

感染者数というのが日本の場合はPCR検査陽性を指しており、イギリスなどではこの陽性反応者は感染者とカウントしていないのだが、これについても積極的な情報提供が行われないうまま世界で最大となったとかという報道が垂れ流されている。

重症者にしても、感染者数に占める比率の傾向が示されたことがほとんどない。さらに、死者数にしても陽性者であれば死因は何であれ、コロナ禍による死亡として数字が報道されている。実際の死の直接の原因は心臓病などの既往の疾患かも知れないが、それはまったく無視された数字が出回っているのである。

これだけでも、相当にいい加減と言わざるを得ないが、さらに感染者増加について過去の感染爆発と比較して、年齢層別増加率や重症者と感染者との比率などがまるで情報提供されないから「どの程度の恐れ」を持つ必要があるのかが判断できないのだ。

厚労省には統計を学んだ職員がいないのでは

ないか。法律の解釈だけがカリキュラムだった学部の卒業生ばかりなのではないか。数字の意味や重要性が理解できる職員がいないのではないか。有効数字という概念すら持たないのではないか。そして、これはほぼ震ヶ関全体の問題ではないのか。

長くなったが以上が前段である。以前にも紹介したが、統計を含む理系の感覚がまったくと言っていいほど欠けているのが歴史学の世界である。歴史学はざっくり言えば「それを証明する文献がなければ、それは歴史ではない」という姿勢を持っている。メディアで活躍をしているような視点を提供してくれている有名な東京大学教授の歴史学者がいるが、彼の所属が「資料編纂所」であることは、その証の一つである。

今回は、最近話題の新書を紹介したい。「理系が解釈する日本史」の類書である。この分野についてはYouTubeでの筆者の番組「オンライン国土学ワールド」で何度か紹介している板倉聖宣氏の「日本史再発見・理系の視点から」（朝日選書）を嚆矢とするといっても過言ではないが、板倉氏の研究と関心の領域は広大で、とても一言で紹介できるものではない。固定観念にとらわれた憲法学者などとは異なり、幅の

広い柔軟な研究者であった。

その話題の新書とは、「日本史サイエンス」(壱、貳) - 講談社・ブルーバックス- というものである。作者の播田安弘氏は造船の技術者だったようなのだが、「豊臣秀吉の中国大返し」は本当だったのか、いかにして可能だったのか、船を用いたのではないかなどの疑問に理系の視点から挑戦した非常に愉快的な書物となっている。

この初作が話題となりNHKなどでも取り上げられたこともあって、第貳巻を刊行し、ここでは邪馬台国時代の皆既日食の観察が可能だった時間と場所から、邪馬台国は九州にあったのか、それとも大和だったのかを類推したりしている。

また、日露戦争で日本はロシアのバルチック艦隊を完膚なきまでにたたきのめしたのだが(この完全勝利が、その後の日本人の感覚を麻痺させ、先の大東亜戦争(太平洋戦争)にまで突っ込んでいった原因となってしまった)、それは後に神様となった東郷平八郎の作戦のおかげだったのではないことを、実に丹念に科学的な証明に挑戦している。

現在ベストセラーであり、身近で手軽に入手できる新書である本書を是非、会員諸氏には推薦したい。数字の意味もわかっていない連中のコロナ騒動報告を政府やメディアから毎日聞かされてうんざりしている理系の諸氏にお勧めしたいのである。

繰り返すようだが、社会現象を「理的に理解する」ことの重要性が、この国ほど欠けている国はないと考える。先の大戦が敗戦に終わってしばらくして哲学者の和辻哲郎は「鎖国」なる

書を著し、そこで、われわれ日本人に欠けているものは何だろうと考えたのだった。

彼の結論は「日本人に欠けているものは、科学的精神である」というものであった。筆者流のたとえで言えば、「1は2より必ず小さい。したがって1t積みのトラックには、絶対に2tは積めない」のだが、われわれは大和魂で頑張ればなんとかなると、愚かにも自動車生産力が100倍の国に挑んだのだった。

和辻哲郎は戦後すぐに日本人の科学的精神の欠如を嘆き、その後しばらくはこの精神の欠如が国を滅ぼすことを知った政治家や官僚が合理性に満ちた施策を連発して戦後復興を果たし、世界の奇跡と言われた経済成長を実現したのだった。

しかし、「戦争を知らない政治家ばかりになるとこの国は危うい」と田中角栄が心配した通りに戦争を知らない政治家や官僚ばかりになった現在では、観念論にこだわってまるで理性的、科学的とはいえない政策を連発し、国民は貧困化の淵に沈み、日本経済は先進国で唯一30年間もまるで成長しない国、つまりは税収の伸びない国に成り果ててしまったのだ。

「10は100より必ず小さい」こと、「20」と「20.0」は意味が異なること、これらの理解すらいらい加減な連中が政策を考えていることなど、戦慄すべき恐怖以外の何物でもないのだ。